

聖書：マルコの福音書 1：14～20

説教題：わたしについて来なさい

日時：2025 年 5 月 11 日（朝拝）

前回の箇所からイエス様が登場しました。イエス様はバプテスマのヨハネから洗礼を受け、荒野で 40 日間、悪魔による試みを受けられました。この準備を経て、いよいよ今日の箇所から公の生涯、公生涯へと進まれます。そのきっかけとして 14 節前半に「ヨハネが捕らえられた後」と書かれています。これはたまたまヨハネが捕らえられた時と時期が重なったという意味ではありません。むしろヨハネが捕らえられた出来事はイエス様が公生涯へと進まれる合図のようなものだったということです。これをもってメシアの先駆者としてのヨハネの働きは終了し、いよいよメシア本人が表舞台に出て来るという関係です。

ヨハネが誰に捕らえられたのか、また捕らえられてどうなったのかについては、この後、6 章 17 節以降で回想の形で記録されます。ここで注目すべきは「捕らえられた」と訳された言葉は「引き渡された」という意味の言葉であることです。これと同じ言葉はこの後、イエス様に対しても使われます。9 章 31 節の「人の子は人々の手に引き渡され、云々」、10 章 33 節の「人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡され」、14 章 41 節の「人の子は罪人たちの手に渡されます」などです。いずれもイエス様の十字架の苦難と関係する言葉です。イエス様がこのように引き渡されたのは誰によってかと言えば、それは神によってです。とするならこのヨハネが引き渡された出来事の背後にも神の御手があったと考えられます。ヨハネはこのように神の御手によって引き渡され、苦難を受けるというその生き方においても、メシアの将来を指し示すメシアの先駆者だったのです。

イエス様はこの出来事を知って故郷ガリラヤへ行き、神の福音を公に宣べ伝える活動を開始されました。その第一声が 15 節に記されます。「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」 まずイエス様は「時が満ち」と言われました。これは神が定めた時が到来したという意味です。神は旧約時代から預言者を通して、やがてメシアを遣わして終末的な日、終わりの日を来たらせると約束して来られました。旧約時代はそのメシアの日を待ち望む時代でした。その待ち望んだ定めの時がついに来た！ということです。これは確かにメシアの先駆者ヨハネがその役目を終了し

て舞台から退くこととセットであると言えます。

この「時が満ちた」結果として「神の国が近づいた」とイエス様は宣言されました。「神の国」とはご存知の通り、日本とかアメリカといった目に見える国や領土のことではなく、一言で言うなら「神のご支配」のことです。最初の人間アダムは罪を犯して神から離れ、サタンに従い、以来この世界はサタンの支配下にあると聖書は語っています。しかし神はこのような世界と私たちを見捨てず、やがて救い主メシアを遣わして回復の時を来たらせてくださる、神の恵みの支配が人々の上に臨むようにしてくださる、と旧約の預言者たちを通して約束して来られました。その神の国、神の恵みの支配が近づいたというのです。ここで良く問われるのは、この「近づいた」という言葉はどういうニュアンスなのかということです。近くまでは来たが実際にはまだ来ていないという意味なのか、それともそれはすでに来たという意味を含むのか、このギリシャ語を巡って色々議論されます。この言葉だけから言うなら神の国はすでに来ているという意味があると断言するのは難しいようです。しかしすべての言葉はその前後関係、文脈の中で理解されるべきです。その前の部分で「時は満ち」と言われました。待ち望む時代は終わり、いよいよ成就の時、実現の時が来た！と言われました。そう言えるのは何と言っても約束のメシア・イエス様がここにおられるからです。神の国の到来はイエス様の到来と一つです。ですからイエス様がここにおられて、このように宣言しておられることの内に神の国は実際に地に臨み始めたと言うことができます。イエス様はそのことをたとえばマタイの福音書 12 章 28 節で次のように確言しています。「わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」　ただこの時はそれが地に臨み始めたという段階であり、その完成はなお将来に属しています。そこでイエス様はこの公生涯の第一声においては「神の国が近づいた」という表現をされたと考えられます。

私たちはここから聖書の歴史観を改めて教えられます。世界の歴史は意味や目的もなく、ただ循環しているものではありません。「時は満ち」と言われたように神はこの世界の歴史に明確な目的を持っています。そして「時が満ちた」という言葉はメシアを遣わすこととセットで語られて来た終わりの時代に入ったことを意味します。ここに世界の歴史は直線的に考えられていることが明らかなです。この世界の歴史には始まりがあり、途中があり、終わりがあります。今や歴史は最終局面に入ったのです。メシアの到来とともに約束されて来た神の国、神のご支配が訪れ始めたのです。

この宣言に基づき、イエス様は言われました。「悔い改めて福音を信じなさい。」 悔い改めについてはバプテスマのヨハネも宣べ伝えていました。これは考え方、態度を変えることです。神を無視し、自分中心、自分勝手に歩んで来た生活を改め、神を中心とし、神に喜ばれる生活へ進むことです。それにプラスしてイエス様は「福音を信じなさい」と言われました。福音とは何かについてはこの福音書全体を通してこれから語られて行きます。しかしその基本はすでに1章1節に示されていました。そこに「イエス・キリストの福音」とありました。つまり福音を信じるとはイエス・キリストを信じることと同義と言えます。キリストは終わりの日に神が与えると約束して来られた救い主です。歴史はいよいよ最終段階へと入り、さばきの手前まで来ました。この切迫した状況にあることを覚えて、神が遣わしてくださったキリストを信じてさばきから逃れる者となるように。そして神が約束された恵みの支配、恵みの世界に生きる者となるように！ということです。

さてこのイエス様のこの公生涯における第一声が続いて記されていることは何でしょうか。それはイエス様がご自分の弟子たちを求められたことです。イエス様はガリラヤ湖のほとりを歩いてそのことをされました。エルサレムへ行って優秀な者たちをリクルートされたわけではありません。誰からも注目されていない一地方のガリラヤで漁師として働いていた人たちの中から選ばれました。イエス様はまずシモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になりました。つまり仕事であったということです。その二人に「わたしについて来なさい」と言われました。このような弟子の集め方は当時においては異例だったようです。古代世界でラビは学生を募ることはしませんでした。生徒の方がラビのもとで学ぶことを志願しました。つまり生徒が先生を選ぶということです。しかしイエス様は違いました。イエス様が弟子を選びました。イエス様が主導権を持って働きかけています。それは人から始まる事柄ではなく神から始まる事柄でした。

イエス様は二人に「わたしについて来なさい」と言われました。これはイエス様と師と弟子の関係に入るようにとの招きです。イエス様の後に従い、イエス様に学び、イエス様とともに生きる者となるように。そうすれば「人間をとる漁師にしてあげよう」とイエス様は言われました。これは漁師である彼らに合わせた言い方で、その意味は彼らにすぐ分かったでしょう。これまでの彼らの仕事は魚を取ることでした。し

かしこれからは人を救いへとすなだる者になります。時はいよいよ歴史の最終段階に入りました。間もなく来るさばきの日に滅びる者とならないように、メシアの救いにあずかる者となるように、キリストとともに働き、神の救いのわざに参与する者となることです。ここで大事なのはイエス様が「人間をとる漁師にしてあげよう」と言われたことです。「人間をとる漁師になりなさい」とか、「その候補者にします」、「でもダメだったら捨てるかもしれません」ではありません。イエス様とともに歩む中でイエス様が教え導き、訓練し、その働きができるようにしてくださるのです。そのための面倒を見て、ともに働く特権にあずからせてくださるのです。

これを聞いた二人はどうしたでしょう。彼らはすぐに網を捨ててイエス様に従いました。網は漁師にとって大切な仕事道具です。彼らはこの時も網を使って仕事をしていました。彼らは決して貧しく、あまり仕事もうまく行っていない人たちだったのでありません。この地方における漁業は主要産業の一つでした。彼らは十分に儲けていたと考えられます。その彼らがその仕事を捨ててイエス様に従ったのです。

次のエピソードではさらに話がエスカレートします。ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネも漁師でした。彼らは次の漁のために網の手入れをしていました。彼らは父と一緒にいた他、そこに雇い人たちもいるほど事業は成功し、裕福でした。しかし彼らもイエス様がお呼びになると、そこにあるものをそこに残してイエス様に従いました。そればかりか父ゼベダイを残して、ともあります。衝撃的な話です。なぜ彼らはこのようにすぐにイエス様について行ったのでしょうか。いきなり言われてこれに応答できるものかと私たちは戸惑うかもしれません。ヨハネの福音書を読んで分かることは、彼らはこの時初めてイエス様に会ったのではないということです。4人の内、アンデレとヨハネはバプテスマのヨハネの弟子でした。彼らはバプテスマのヨハネに導かれて彼が指し示すイエス様に会いました。またアンデレは兄弟シモンも連れて行ったため、シモンすなわちペテロと名づけられる彼もイエス様に会い、この方こそメシアであると教えられていました。マルコはそういったことはここに書きません。それは彼がこの記事を書いた目的は、イエス様の権威を強調することにあつたからだと言われます。この後、来週見る 22 節ではイエス様の教えに権威があったことが言われます。その後の 27 節では悪霊の上にも権威を持っていること、その後の 29 節以降では病気の上にも権威を持っていること、2 章 1 節以降では罪を赦す権威を持っていることが語られます。そのような観点から「わたしについて来なさい」の一言をも

って弟子たちを召し、彼らからすぐさまの応答を引き出すことができるイエス様の權威をマルコはここで強調しようとしていたと言われます。おそらくそうなのでしょう。

しかしこのことはもちろん彼らは訳も分からない内にいつの間にかイエス様に従う者にさせられたということではありません。参考になるのはマタイの福音書 13 章 44～46 節の次の言葉です。「天の御国は畑に隠された宝のようなものです。その宝を見つけた人は、それをそのまま隠しておきます。そして喜びのあまり、行って、持っている物すべてを売り払い、その畑を買います。天の御国はまた、良い真珠を探している商人のようなものです。高価な真珠を一つ見つけた商人は、行って、持っていた物すべてを売り払い、それを買います。」 彼らはもともとバプテスマのヨハネの弟子として神の国を待望していた人たちです。その彼らはついに現れたメシアである方からの招きを受けて喜びをもって立ち上がって行ったのです。たとえそのためにどんなに大切なものを後ろに置くことになったとしてもです。それ以上の特権と祝福が自分たちの前に差し出されていることを見て、喜びをもってイエス様について行ったのです。そのように彼らを導くことができるイエス様だったのであり、それほどメシアがここにおられたということです。

と同時にこれはイエス様に従う者のあるべき姿、自然な姿、模範としても私たちの前に提示されているのでしょう。ここを読んである人たちは、自分の今の生活を捨てるのか？生活基盤もか？さらには父までもか？これは異常で狂気じみた話ではないかと思うかもしれません。しかしこれと同じことはこの後、この福音書の中で繰り返し語られます。イエス様は「永遠のいのちを受け継ぐためには、何をしたら良いでしょうか」と尋ねた人に対して、10 章 21 節で「あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに与えなさい。・ ・ ・そのうえで、わたしに従って来なさい」と言われます。あるいはその後の 10 章 29 節で「わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子ども、畑を捨てた者は、云々」と語り、そういうことがあり得るとされます。またこの福音書の中心メッセージと関わると言われる 8 章 34 節では「だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」と言われます。これら所有物や富、あるいは家族、親、兄弟はみな、もちろん悪ではありませんが、それらが神との間に割り込んで、神に従う歩みを妨げるようであってはならないと繰り返し言われています。つまり何を第一とするのか、その優先順位が問われています。もし神に従うことと、先にあげたことがぶつか

らないなら、それらを保っていても問題ありません。神に従うという第一優先順位の下で、それらを考え、ふさわしく用いて行けば良いのです。しかしもしそれらがぶつかった時、どっちを優先するのか。その時、この4人の姿こそ主の弟子としての正しいあり方、あるべきあり方であるということも、この箇所は私たちに語っているのでしょう。

このような話は今日きっと多くの人々に好まれないと思います。むしろこんな絶対的要求をする宗教は危険であり、とんでもない教えだと憤慨する人の方が多いかもしれません。そう思うのもある意味で理解できます。しかしです。ここにおられたのは誰なのかということです。ここにおられるのはその辺の誰かではありません。この方は神の子イエス・キリストです。長い旧約時代の準備を経て、ついに時満ちて遣わされた約束のメシア、この終わりの時代の唯一の救い主です。このお方の声に聞き従うことを一番大切にせずして私たちは一体何を大切にすべきでしょうか。この方に従うこと以上に重要なことは他に何かあるのでしょうか。こう考えても良いと思います。確かに今日の箇所にある通り、主に従う者たちに求められている要求は高いものです。とんでもない犠牲を要求する教えだとある人は思うかもしれません。しかしイエス様が私たちに求められることは、イエス様ご自身が私たちに与えてくださるものに比べるなら、はるかに小さく、少ないのです。イエス様は後に10章45節で、ご自分について「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来た」と言われます。イエス様はとてつもない犠牲を払って、ご自身により頼む者たちを救ってくださいます。そのことを思うなら、私たちは愛と感謝の心から喜びをもってイエス様の招きに応答し、従うのみではないでしょうか。

「時は満ち、神の国は近くなった」とイエス様は言われました。今から二千年前にすでにそうであるなら今日は益々歴史の最後の日直前の状態にあります。パウロが言うように「主は近い」のです。そんな今日の日もイエス様は主権をもって「わたしについて来なさい」と一人一人に語りかけておられます。特別注目されているわけではない普通の私たちに対して、恵みをもってです。人間的な心配はし始めたらきりがありません。しかしイエス様がもたらしているのは神の恵みのご支配です。この神の国を退けて何の幸いが私たちにあるのでしょうか。またこの招きに従うなら神はどうしてその私に悪いようにされるのでしょうか。マルコは弟子を招き、応答させるイエス様の権威について記しました。私たちもイエス様の御言葉に聞き、イエス様によって導

かれます。人間的な心配を超えて神の恵みのご支配の中で十分な祝福にあ
ずからせていただく者へ。そしてイエス様に教えられ、導かれて、完成の間近い神の
国のためにともに働き、用いていただく特権と光栄に歩む者とされて行きたいと願
います。